卒業生紹介

「人」と「人」を結ぶ　～国際交流のスペシャリスト～

Nishide Yuka
西出 由香

外務省大臣官房人物交流室
課長補佐

1994年お茶の水女子大学文教育学部卒業。同年、外務省入省。95年から99年までチェコ共和国にて在外研修および日本大使館勤務。以降、本省勤務。2013年から現職。岡山県出身。

ロールモデルとの出会い

外務省に入って20年。西出由香さんは、現在、大臣官房人物交流室で課長補佐として、「JETプログラム（The Japan Exchange & Teaching Programme）」の推進に力を注いでいる。JETは日本全国の小、中、高等学校で外国語の指導に従事する青年や、地方自治体に勤務する「国際交流員」を日本に招致するプログラムで、今年28年目を迎える。来日したJETプログラム参加者と地域の住民とは様々な形で相互交流を深め、帰国後もその絆は引き継がれていくという。「グローバル化の進展に伴い、広報や文化交流を通じて一般市民に直接働きかける外交、いわゆる『パブリック・ディプロマシー』と呼ばれる活動がいまとても重要になってきています」と、西出さんはその意義を語る。

大学3年生の秋、西出さんは学内の就職説明会で、「外務省専門職員」として勤める卒業生の話を聞いた。「こういう職業があるんだ。私にもできるかもしれない」。元々、得意な英語をいかせる仕事に就きたいと漠然と考えていた。働くモチベーションを高く持ち続けるために、「公に、人のために働きたい」という思いも抱いていた。さらに、公的機関では女性が働き続けるための制度が整っている。「ロールモデルは大切ですね。この出会いがなかったら可能性に気付かず、今の自分はないかもしれません」

チェコ専門家への道

外務省専門職員は、高い語学能力を有し、特定の地域の社会や文化、歴史等に通じたスペシャリストとして活躍することが期待される職種だ。外務省が独自に実施する採用試験は難関で狭き門として知られる。西出さんは専攻の英語・英文学では学ぶ機会のない国際法、経済、憲法などを独学で勉強する一方、公務員試験対策予備校にも通い、こつこつと準備をすすめた。

1994年、晴れて外務省入省。同期は57名。この年は、女性が一気に増え、半分を超えた。入省後は約40言語の中から研修語が割り当てられる。西出さんは希望言語ではないチェコ語だった。生まれて初めて触れる言語を習得するため、1年間は実務を覚えながらマンツーマンで集中研修に励んだ。チェコ語は文法が複雑だが、それをマスターしないと辞書すら引けない。そもそもチェコ語と日本語のきちんとした辞書も無いなか、英語を介して日本語に訳す方法で語彙を頭にたたきこんだ。2年目は在外研修でチェコの首都プラハへ。2年間現地の大学などに通い、外交面で通訳が勤まるレベルまで磨きをかけなければならない。研修後はいよいよ外交官としてのスタートが待っている。在チェコ日本大使館で広報文化班に配属され、日本文化の紹介や要人のチェコ訪問への対応に従事。通年4年半をプラハで過ごし、1999年に帰国した。

働き方を変えてキャリアを積む

西出さんの朝は早い。ピラティスのレッスンを受ける曜日以外は7時半にはオフィスに到着し、日中はひたすら仕事をこなす。チェコから本省に戻って以来、現在のポストに至るまで、3、4年ごとに経済局漁業室、欧州局中・東欧課、第二国際情報官室と3つの部署を異動し、さまざまな経験を積んだ。多岐にわたる業務をこなすため遅くまで職場で働くこともあったが、育休が明け職場復帰を機会に働き方を全面的に変えた。西出さんにとってのターニングポイントはこの時期だ。心掛けたのは、「集中、用意周到な準備、無駄を省いて成果を出す」こと。保育園、学童保育などを利用しながら、「早朝出勤、早めの帰宅」のワーキングスタイルはすっかり定着した。

隙間の時間を有効に使って、今でも昼休みにチェコ語のフォローアップ研修を受けている。古都プラハで外交官としてのキャリアを踏みだして以来、仕事を続けるうえでの大きなやりがいは、「個人と個人、国と国の友好関係が一歩でも前進したと実感できる瞬間に立ち会える喜び」だという。

外交官として必要な要素を尋ねると、「好奇心と飛び込んで行った時の相手とのコミュニケーション能力」という答えが即座に返ってきた。私たちが「パブリック・ディプロマシー」を実践するときも同じ心意気で臨みたい。

文責：坪田秀子（学長特命補佐）

わたしのオフタイム

今年は「和」がテーマ。省内のサークルで煎茶の茶道を始めたのに続き、和菓子作りの教室にも通っている。海外に出た時に日本文化の一環として紹介できたらと、趣味と実益を兼ねて楽しんでいる。